変わる日本の「暮らし」と「まち」 33

地域の安全・安心・絆の中心となる住宅

宮城・多賀城市営桜木住宅

（2014年◆平成26年10月完成）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

仙台市の北部に位置する多賀城市は、仙台のベッドタウンとして6万人を超える人口を擁する。その始まりは、平城京に都が置かれた奈良時代にさかのぼる。仙台周辺が陸奥国（むつのくに）と呼ばれていた724年、蝦夷（えぞ）開拓の本拠として大野東人（おおのの あずまびと）によって築かれたのが多賀城である。以来約200年、多賀城は陸奥の国府とされ、東北の中心と位置づけられた。

今では城址が認められるだけだが、多賀城の位置や創建などの経緯が書かれた「多賀城碑」が残っている。日本三大古碑のひとつとされ、重要文化財にも指定されている。松尾芭蕉が「奥の細道」の道程で訪れ、この多賀城碑を見て涙を流したことでも知られる。

東西に細長い多賀城市は、一部の地区が仙台港に面しているものの、多くの地区は海に接していない。だが、2011年3月11日の津波は内陸部も襲い、地震と津波を合わせると1万を超える家屋が被災した。今回の舞台となる桜木北地区の江口宏地区長は語る。

「ここは海まで車で5分、歩いて30分はかかる。多賀城市のなかでもかなり低い地域なので、昔から豪雨になると水浸しになることはあったよ。でも、まさか津波がくるとは思わなかったね」

市内を流れる砂押川（すなおしかわ）を遡上した津波は、江口氏の言う津波とは縁遠い桜木地区にも流れ込み、一帯は約2メートルまで浸水した。

◆安全を突き詰めたつくり

多賀城市では、市内4ヵ所で災害公営住宅整備事業を進めることになった。市はURに建設を要請し、今年10月に桜木住宅（160戸）が完成した。市長の菊地健次郎氏はこう語る。

「待ちに待った災害公営住宅の完成です。狭くて不便な仮設住宅暮らしをされていた方々が、ゆとりある生活ができるようになると思うと、私もワクワクします」

この災害公営住宅を建設する意義は、もちろん仮設住宅で辛い思いをしている被災者に一刻も早く落ち着いた生活をしてもらうためだ。ただ、桜木住宅はそれだけにとどまらない。安全、安心、コミュニティのつながりという、ただでさえ難しい複数のテーマをすべて包含した住宅となっている。

建物の1階部分には居住スペースを設けていない。地上4・5メートルの2階部分が「コミュニティデッキ」でつながれ、今回のように2メートルまで水没しても棟と棟を行き来できる。階段を住宅の両側面、つまり隣接する地域側に設置することで、いざというときに地域住民が駆け込めるように設計されている。

階段を屋上まで昇ると、避難できるスペースが広がり、棟ごとに防災倉庫が設置されている。中には水や食料などが備蓄される予定で、避難してきた人に配布される。ここ桜木住宅は、地域の避難場所となる可能性がある団地なのだ。

「市役所だけではここまでできなかったでしょう。URさんの豊富な経験のおかげです」

菊地市長はそう話す。団地に住んだ経験のない馬場幸一朗氏は不安もあるというが、新しい環境に対して期待もしている。

「震災時に助け合った経験を生かし、入居者や地域住民の方々という新たな仲間と協力しながら生活していきたいと思います」

子どもたちが製作した「みんなの壁」は多賀城市桜木住宅に飾られた

◆あらゆる世代がつながるまちに

一方、桜木住宅には入居者が気軽に立ち寄れる「みんなのリビング」が棟ごとに設置された。また地域住民であれば利用できる「集会所」や、高齢者の安心に心を砕く生活相談員が常駐する「高齢者生活相談所」もある。

災害公営住宅はハード面だけでなくソフト面を充実させることが大事である。そう語るのは、UR宮城・福島震災復興支援本部住宅整備部の関本恒久だ。

「住民のみなさんが集うだけでなく、参加できるイベントをやることで、交流のきっかけができると思うのです。様々な世帯の方々がつながり、話し合いながらみんなのリビングなどを活用していくことでさらにつながりが強くなる。私たちは、そのきっかけづくりのお手伝いをしたいと思っています」

多賀城市地域コミュニティ課の千葉明宏副主幹もこう語る。

「URさんのアイデアやサポートをいただいているので、市としても心強い。これから、桜木住宅を含めた地域全体でいろいろなことをやっていきたいですね」

さらに、桜木住宅には保育所も併設されている。1974年から地元にある桜木保育所を再建したものだ。地震発生後、園児62人は無事避難したが、揺れで散乱した教室を片付けようと一部の先生たちが保育所に戻ったときに津波がやってきた。自衛隊員に救出されるまで、先生たちは金網にしがみついて難を逃れたという。

URは、震災で卒園式ができなかった子どもたちに参加してもらい、復興のシンボルとなるような取り組みができないか知恵を絞った。発想したのはモニュメントだ。これをみんなで製作し、保育所の壁面に飾ることができないか。

URの提案に、市も動き出した。

仙台出身のデザイナー朝倉弘平氏が、子どもたちとのワークショップで出たアイデアをもとにデザインを考え、子どもたちと親、先生がタイルに絵を描いて完成させた。これが「みんなの壁」だ。テーマは「SPRING KIDS」。保育所と地区の名称である「桜」が象徴する春と、子どもたちが元気に飛び跳ねる姿をばねに見立てスプリングにかけたという。関本は語る。

「ただ住宅をつくるだけで終わるのではなく、子どもたちを地域ぐるみで育てていくことのきっかけもつくりたいと考えたのです」

桜木住宅は、子どもから高齢者まであらゆる世代が住みやすいまちにしようという姿勢が徹底されている。新しい入居者が地域に根づいたとき、桜木地区はさらに強い絆で結ばれるはずだ。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社